今なお燦然と珠玉の光を放つ「説話文学」の研究書、論文を復刻。

説話文学研究叢書

全八巻

黒田　彰・湯谷祐三　編・解説／クレス出版　発行

説話文学研究叢書　全八巻

黒田　彰（佛教大学教授）
湯谷祐三（佛教大学講師）　編・解説

第一巻　国民伝説類聚　前輯
第二巻　校訂広本　沙石集
第三巻　校註　沙石集
第四巻　孝子説話集の研究　二十四孝を中心に　中世篇
第五巻　孝子説話集の研究　二十四孝を中心に　近世篇
第六巻　孝子説話集の研究　二十四孝を中心に　近代篇（明治期）
第七巻　岡田希雄集
第八巻　小林忠雄集

A５判／上製函入／クロス装

揃定価98,700円（本体94,000円+税５％）　平成16年10月25日刊行
ISBN4-87733-240-5（セット）C3393

●クレス出版好評既刊書●

御伽草子研究叢書

全９巻

藤井　隆　編・解説

第１巻　古注釈と文学史書集
第２巻　研究書集成Ⅰ　室町時代小説論
第３巻　研究書集成Ⅱ　島津久基集
第４巻　研究書集成Ⅲ　島津久基・後藤丹治集
第５巻　研究書集成Ⅳ　講座、雑誌特輯集
第６巻　解題書集成Ⅰ　近古小説解題
第７巻　解題書集成Ⅱ　未刊中世小説解題
第８巻　解題書集成Ⅲ　室町時代物語集第一～第四
第９巻　解題書集成Ⅳ　室町時代物語集第五ほか

揃定価84,000円（税込）　ISBN4-87733-197-2（セット）

能謡研究叢書

全８巻

羽田昶・西哲生　編・解説

第１巻　能の栞　一の巻～三の巻　大和田建樹
第２巻　能の栞　四の巻～六の巻　大和田建樹
第３巻　能楽全史　横井　春野
第４巻　能謡語彙　観世流改訂本刊行会
第５巻　能謡秘訣　大和田建樹
第６巻　謡の基礎技術　三宅　統一
　　謡曲文学講話　五十嵐　力
第７巻　能楽随想　観世　左近
第８巻　日本劇場史の研究　須田　敦夫

揃定価99,750円（税込）　ISBN4-87733-199-9（セット）

KRESS　株式会社クレス出版　〒103-0001　東京都中央区日本橋小伝馬町14−5　メローナ日本橋
☎03-3808-1821　FAX03-3808-1822　http://www.kress-jp.com/

刊行に当たって

黒田　彰・湯谷祐三

近代的な意味での説話文学研究は、『今昔物語集』『宇治拾遺物語』など、いずれも「物語」と称する作品を、『源氏物語』等のいわゆる「王朝物語」と区別し、これらに「説話（文学）」なる新しい名称を与えて意識的に考察の対象とするところから出発している。それまで、「雑書」として散在していた諸作品は、「説話」という格好の名前を得て俄かに結集し、一群の纏まりをもつ研究対象として立ち現れたのである。

爾来、説話文学研究の展開は、説話の「変幻窮りなく玄妙自在」（島津久基）な特性故に、研究対象は爆発的な膨張を続け、逆に「説話」という名称に包括されるものの正体を具体的に把握することは目下、頗る困難な状況にあると言うべきだろう。このような現状をふまえ、改めて先人の足跡を辿る時、着実な文献学研究の方法と成果の中には、今なお燦然と珠玉の光を放つもの多く、当復刊書目の選定に当たり、有意義な著作の中から、何を選択するか、限られた紙数を鑑みて実に悩ましい取捨選択を迫られることとなった。本叢書のおよその編集方針は、次の通りである。

単行本については、現代の研究水準から見ても充分に参照する価値を有すると同時に、戦後復刊されたことのない、真に所蔵の限定された参看に困難なものだけを厳選した。論文に関しては、既に個人の論集として集成刊行されているものは原則として除外し、著者の急逝などにより、遂に論集として纏められることなく、常に各研究者をして古雑誌を手にコピー機へ走らしめている二人の先達の説話関係論文を集成することとした。

第一巻の島津久基『国民伝説類聚』前輯は、比較文学の視座から説話文学の関係相を縦横に論述したもので、今日においても猶、更に掘り下げるべき示唆に満ちた名著である。

第二巻・第三巻には、鎌倉後期の『沙石集』の二大伝本である広本と略本の活字翻刻を復刻した。いずれも『沙石集』研究には必備の書であるが、今日では稀覯本に属している。

第四巻から第六巻にかけて、徳田進氏の幻の先駆的名著『孝子説話集の研究』全三冊を一括して復刻した。近時本邦における孝子説話研究の高まりは、この分野が、中国を中心とした広く東アジア全域の文化史に波及する問題を孕んでいることを示している。

第七巻には故岡田希雄氏の説話関係論文を集成した。説話文学研究の方面では源為憲についての考証が夙に知られるが、古辞書『名語記』についてのそれなど、有益な論考が多数ある。

第八巻には故小林忠雄氏の説話関係論文を集成し、同氏収集の小林文庫蔵本の内、その存在が中世説話研究に大きな影響を与えた資料を影印で収録した。氏の論考は中世説話文学作品全般に亙り、今日でも研究の基礎となるべきものである。

以上、全八巻に収録される論考・資料のいずれもが、稀覯且つ、有益なものであることは、ここに贅言を要するまでもなく、研究者の久しき渇仰を癒すものと信じる次第である。

説話文学研究叢書　全八巻

第一巻　**国民伝説類聚**　前輯
島津久基著／大岡山書店／昭和8年

第二巻　**沙石集**
校訂広本　**沙石集**
渡辺綱也校訂／日本書房／昭和18年

第三巻　**沙石集**
藤井乙男編／文献書院／昭和3年

第四巻　**孝子説話集の研究**　二十四孝を中心に　中世篇
徳田進著／井上書房／昭和38年

第五巻　**孝子説話集の研究**　二十四孝を中心に　近世篇
徳田進著／井上書房／昭和38年

第六巻　**孝子説話集の研究**　二十四孝を中心に　近代篇
徳田進著／井上書房／昭和39年

第七巻　**岡田希雄集**
三宝絵詞（論文）
源為憲伝攷（昭和17年）
源順及同為憲年譜（昭和17、18年）
俊頼無名抄（論文）
俊頼無名抄の著者と其の著述時代（大正10年）
今昔物語集（論文）
今昔物語の成立年時に関する疑問（昭和8年）
発心集（論文）
鴨長明発心集に就いて（昭和5年）
鴨長明発心集の著作に関する疑問（昭和5、6年）
再び発心集に就いて述ぶ（昭和11年）
閑居友（論文）
前田家蔵伝為相筆本閑居友を見て（昭和15年）
古辞書（論文）
塵袋の著者についての臆測（昭和7年）
鎌倉期の語原辞書名語記十帖に就いて（昭和10年）

第八巻　**小林忠雄集**
宇治拾遺物語（論文）
宇治拾遺物語の校合書入本二種――石川雅望書入本と小林歌城書入本とについて――（昭和17年）
「氷のやうなる刀」小論、附「わおのれ」は幽霊語か――宇治拾遺物語難語考――（昭和34年）
「あがふ」「あがなふ」「あらがふ」について――宇治拾遺物語難語考――（昭和35年）
宇治拾遺物語の原形について（昭和35年）
世継物語（論文）
世継物語・宇治大納言物語の成立について――特に、二書の関係、編纂の資料、成立過程、著作年代、其の他を中心に――（昭和32年）
古事談（論文）
古事談略本考（昭和16年）
十訓抄（論文）
十訓抄の古版本に就いて（昭和25年）
古今著聞集（論文）
古今著聞集と真言伝（昭和15年）
江談抄の余波を訪ねて――古今著聞集出典考――（昭和16年）
古今著聞集概論（昭和17年）
神宮文庫本源師光集には実国卿集の攙入あるか――古今著聞集の出典研究に因みて（昭和30年）
撰集抄（論文）
撰集抄に関する一考察――歌物語の検討と、著作年代の考証を中心に――（昭和15年）
土御門院御百首に関する覚書――一異本の紹介と撰集抄との交渉を中心に――（昭和17年）
撰集抄略本攷――撰集抄の略本は一種の抄略本なるべし――（昭和17年）
撰集抄板本管見――広本系統の板本六種に就いて――（昭和18年）
近古小説硯破の成立に関する一考察――附、撰集抄略本の作成年代について（昭和31年）
沙石集・寝覚記（論文）
沙石集の版本に就いて――特に整版本・活版本を中心に――（昭和34年）
無住と蓮華寺（昭和34年）
無住国師の近親の人々――其の祖母、伯母、父母、弟などについて――（昭和35年）
寝覚記新考――主として其の出典、著作年代、著者の問題に就いて――（昭和25年）
三国伝記（論文）
「三国伝記」作者並成立私考――巻十二第二十一話「放鯉沙門事」を中心に――（昭和14年）
長谷寺霊験記と三国伝記――両書の説話を論じて、三国伝記における沙弥玄棟の編述態度に及ぶ――（昭和16年）
三国伝記と三宝感応要略録――三国伝記出典考の一部として――（昭和22年）
三国伝記と宝物集――三国伝記出典考の一部として――（昭和26年）
三国伝記の古版本について――三国伝記伝本考、其の二――（昭和35年）
名古屋大学小林文庫蔵中世説話資料（影印）
『内外因縁集』
『百因縁集』
『因縁集』

沙石集第一神祇

夫麁言軟語ミナ第一義ニ帰シ、治生産業併實相ニソムカス、然レハ狂言綺語ノアタナル戯ヲ縁トノ佛乗ノ妙ナル道ヲシラ（三字ニ入）シメ、世間浅近ノ賤コトヲ譬トメ勝義ノ深キ理ニ入レ（三字チ知）シメムト思、是故ニ老ノ眠リヲサマシ、徒ニ（ナ）（ル）手スサミニ、見シ支聞シ事思出ニ随テ、難波江ノヨシアシヲモエラハス、藻塩ノ草手ニ任テカキアツメ侍ル也、カヽル老法師ハ無常ノ念々ニヲカス支ヲ覺リ、冥途ノ歩々ニ近ツク支ヲ驚テ、黄泉ノ遠キ路ノ粮ヲツヽミ（三字積）、苦海ノ深キ流レノ船ヲヨソフヘキタメニ、徒ナル興言ヲアツメ賤（虚）キ世ノ支ヲシルス、時ニアタリテハ光陰ヲ不レ惜、後ニ於テハ賢哲ヲハチス、ヨ」〔一オ〕シナキニ似タレトモ、愚ナル人ノ佛法ノヲホキナル益ヲモ不レ覺、和光ノ深心ヲモ不レ知、賢愚ノシナコトナルヲ不レ弁ヘ、因果ノ理定レルヲモ信セサルタメニ、或經論ノ明ナル文ヲヒキ、或先賢ノ殘セル誡シメヲノス、夫道ニ入方便一ニ非ス、悟ヲ開ク因縁是多シ、其ノ大ナル意ヲシレハ諸教ノ義コトナラス、修ニ万行一旨皆同シキ者ヲ哉、是故ニ雑談ノ次ニ教門ヲヒキ、戯論ノ中ニ解行ヲシメス、此ヲミム人拙キ語ハヲアサムカスメ法義ヲ覺リ、ウカレタル事ヲタヽサスメ因果ヲワキマヘ、生死ノ郷トヲ出ル媒トシ、炎（煖）ノ都ヘ到ルシルヘトセヨト也、是則愚

第四章　二十四孝のお伽草子としての成立

第一　お伽草子化の原因

一　地盤から来る内因

五山によって迎えられ、ここを根拠として広まった二十四孝は、もとより漢文形態で読者の前に出現し、素朴期の姿を示したのであったが、この普及につれて、一般はさらに平易に読めるものを望んだ。とくに子弟の場合においてそうであったが、これは他面お伽草子の発達に伴い、漢文体二十四孝の当然和文化されないわけには行かなかった運命を語るものである。

ことにお伽草子が持つ啓蒙的意義は、右の場合幼童婦女子の徳性啓発に適って二十四孝の飜訳の時期の招来となったのである。またお伽草子の領域で、家と親子の関係を重視したものが多かったことも、二十四孝を和文化する地盤となったのである。

すなわちお伽草子の作者の抱いた理想の家は、鶴の草子、花世の姫、文正草子、俵藤太物語に見るように、日本の公卿や武士の、それも上位に位する権勢実力富貴名望の兼ね備わった家であった。それ故よき子を得て、家を継がせ興すことが望まれた。ここに子なき場合は、申し子の希求となって、子宝思想を深めたのである。俵藤太物語を除いた同上の草子やのせざる草子、ささやき竹、一寸法師、小おちくぼ、凡天国、玉水物語等は、これを示している。しかしこの理想も戦乱と凶作と経済難に悩まされることの多かった室町時代にあっては、現実の力に圧倒されて、むしろ現実の非事を反映せねばならぬものがあった。従って親子の別離や再会の喜びは、さくらの中将、三人法師、忍音物語、朽木桜の作者らの好題材とする所となった。また親子の離反が、居所処を異に